

スポーツ・教育振興調査特別委員会会議記録

スポーツ・教育振興調査特別委員会委員長 名須川 晋

- 1 日時
平成 28 年 8 月 3 日（水曜日）
午前 10 時 2 分開会、午前 11 時 49 分散会
- 2 場所
第 4 委員会室
- 3 出席委員
名須川晋委員長、千葉絢子副委員長、郷右近浩委員、高橋但馬委員、
菅野ひろのり委員、樋下正信委員、佐々木茂光委員、城内よしひこ委員、佐々木努委員、
中平均委員、吉田敬子委員、白澤勉委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
工藤担当書記、伊藤担当書記
- 6 説明のため出席した者
チェアスキーヤー 横澤高德氏
- 7 一般傍聴者
1 名
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
「障がい者スポーツにおける現状と課題について」
 - (2) その他
次回の委員会運営について
- 9 議事の内容

○名須川晋委員長 ただいまからスポーツ・教育振興調査特別委員会を開会いたします。
これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付いたしております日程のとおり、
「障がい者スポーツにおける現状と課題」について調査を行いたいと思います。
講師として、チェアスキーヤー、横澤高德様をお招きいたしておりますので、御紹介いたします。

○横澤高德講師 皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました横澤高德と申します。
よろしく申し上げます。

○名須川晋委員長 横澤様の御略歴等につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、「障がい者スポーツにおける現状と課題について」と題しまして、バンクーバーパラリンピック日本代表選手として御活躍された横澤様の体験を通して、障がい者スポーツの現状と課題等について詳しいお話をいただくこととしております。

横澤様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演を快くお引き受けいただきましたことに改めて感謝申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど横澤様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、横澤様、よろしく願いいたします。

○横澤高德講師 改めましてよろしく願いいたします。初めてなので、緊張しております。

よく講演を依頼されるのですけれども、教育現場が多くて、小学校、中学校、高等学校、専門学校の子供たちの前で自分の体験を通して夢を持つことの大切さや、目標に挑戦することの大切さを講演させていただいております。

きょうは障がい者スポーツの現状と課題ということですが、特に勉強をしているわけではないので、現場にいろいろ携わっている中で思ったこと、感じたことをありのままお話しさせていただいて、何かお役に立てればと思います。前半は、いつも子供たちに伝えている自分の体験談の話をしたいと思います。後半は、障がい者スポーツについて感じていること、その後に皆さんとざっくばらんに、これはどうなのかというふうに言っていただければ、わかる範囲でお答えしたいと思います。

まず初めに、この間の希望郷いわて国体・希望郷いわて大会 100 日前記念イベントのときに作成したVTRがありますので、ごらんください。

[VTR上映]

○横澤高德講師 某テレビ局の方がつくってくれたので、うまくできています。私の人生44年間で4分間くらいにまとまっています。今はこうやって車椅子に乗って生活しているのですけれども、生まれたときは健常者でした。先ほどVTRにあったように、バイクのレーサーになりたいというのが小さいときの夢で、その夢を持ったのは保育園の年長のときです。父親と一緒に見に行ったモトクロスのレースで、バイクが物すごいスピードで空を飛んだり、坂を下ったり上ったりする迫力に、今でも覚えているのですけれども、全身ががくがくと震えました。将来は世界一速く走れるレーサーになりたいと思ったのが保育園の年長、そのときから自転車を引っ張り出してはジャンプをする、そういう人生が始まりました。

初めてバイクに乗ったのは小学校3年生のときです。子供用のポケットバイク、50ccの小さいバイクに初めて乗りまして、その日から毎日、学校から帰ってきては庭でバイクに乗るといったのが小さいときの思い出です。

学校から帰ってきたら必ずバイクに乗っていたのですけれども、バイクの音がブンブン、ブンブンとうるさい。すぐ隣が小学校なのです。母親が「あんた毎日ブンブン、ブンブン

うるさいから、学校の校庭に行って乗ってきなさい」と言うものですから、校庭に行ってブーンと走ったら、「おまえか、暴走族の始まりは」と学校の先生に叱られたのを覚えていますけれども、それだけ毎日バイクに乗っていたという幼少期でした。

初めてレースに出たのは中学校2年生のときです。岩手県選手権というレースに出まして、初めて出たレースでビリ、最下位で、ヘルメットの中からぼろぼろ、ぼろぼろ涙が湧いてきてとまらなかったことを今でも覚えています。本当に悔しくて、世界一速くなりたいと思って出たレースが何とビリという。でも、そのときの悔しさは今でも忘れないのですけれども、その悔しさをばねに、それから本当に一生懸命練習した結果、1年後に出た岩手県選手権では1位をとることができたのです。

いつも子供たちに伝えるのは、初めからうまくいく人もいるけれども、何事も初めてはなかなかうまくいかない、そのうまくいかないときほど悔しさをぐっとばねのように縮めて、それをポーンと飛躍する力に変えてもらいたいなと思って、子供たちにはいつも悔しさをばねに頑張りましょうという話をしています。

高等学校は岩手県立盛岡工業高等学校の機械科、プロのレーサーの夢を追いかけながら3年間アルバイトをして、もらったお金でバイクのレースや部品代を払っていたという3年間です。いろいろなアルバイトをさせていただいて、すごくよい人生経験になりました。

一番楽しかったアルバイトはピザの配達です。バイクに乗りながらお金がもらえる、これほど幸せなことはないと、天職だなと思って、一生これをやろうかなと思ったのですが、いやいや違うと思ひまして。本当に楽しかったですね。冬は道路が凍りますけれども、当時、30分以内にピザをデリバリーしないと半額だったか、無料になるというレギュレーションというか、規則がありまして、残りあと5分というピザは店長が必ず私に回すのです。「横ちん」と言われて、「レーサーを目指しているのだろう、あと5分で届けろ」と言われてブーンと行って、スコーンと転んで、中のピザがミックスピザのようにぐしゃぐしゃになった、そのようなことをしながら夢を追っていました。

高等学校を卒業しまして、進路を考えました。岩手県はどうしても冬場に雪が降ってバイクの練習ができなくなるので、1年中バイクの練習ができる場所、日本国内のトップレーサー、トップライダーがいるところに修行に行こうということで、静岡県浜松市のスズキ株式会社というところにテストライダーとして就職して、プロのレーサーを目指すという人生が始まりました。希望に夢に、燃えに燃えて静岡県に行ったのですが、夢からどんどんかけ離れていくような現実だったのです。なぜかという、頑張れば頑張るほど、よくけがをしていました。けがでレースに出られなかったり、会社の上司から「おまえレースなんかやめてしまえ」と言われたりして、もう小さいときからの夢を諦めようかなと思った時期もありました。

そのようなときに監督に言われた言葉がすごく心に響いて、今でも残っているのですが、「横澤、おまえ焦るなよ」と言われたのです。「焦ると自分の目の前しか見えなくなって、本当に大事なものを見失ってしまう。今のおまえにできる最大限の努力をして、

チャンスが来るのをじっくり待ちなさい。」と言われたのです。その言葉がすごく心に響きまして、ああ、そうだよなど。自分はプロになりたい、なりたいという気持ちばかりで、焦って空回りをしてけがをしていたのだと、今できる最大限の努力をして、いつか来るチャンスをじっくり待とうと思ったのです。人事を尽くして天命を待つといいますけれども、そういうことなのかなと思います。子供たちには、そういうことも必要だよと伝えさせてもらっています。

監督に言われてちょうど1年後の全日本選手権で4番に入ることができまして、もしかしたら、これが監督の言ったチャンスなのかもしれないということで、1年間、北海道から九州まで全日本選手権シリーズを回りまして、22歳の時に念願のプロの国際A級ライセンスを手に入れました。

子供たちには「夢がかなった瞬間ってどんな感じかわかりますか」と笑いながらクイズを出すのですが、みんなにやにやしながら、「えー」なんて言って。夢がかなった瞬間というのは、本当にほっぺたをつねりたくなるような、夢を見ているような感じなのだよと。でも、必ず夢はかなうとは思っていなかった、できるとは思っていなかったのですが、ただ、どうしても自分がなりたいものになりたいたいという気持ちを諦めなかっただけだよという話をよくしています。自信はなくても、なりたいたいという気持ちを大切に、諦めないという気持ちを、いつも伝えさせてもらっています。

25歳になり、人生の生き方を振り返る時期がありました。現役でレーサーを続けるか、違う道を選ぶかということで、現役の選手をやりながら、後輩の選手を地元の岩手県で育成したいという夢を新たに持ちまして、インストラクターという資格をヤマハ株式会社というメーカーさんからいただいて、岩手県に帰ってきて、新しくバイクを始める子供たちや若い選手を育成するというのを始めたのです。

当時、岩手県には子供たちが自由にバイクに乗れるコースがなかったので、まず初めに、山林を借りまして、木を切ったり草を刈ったりして、仲間と一緒に環境を整えました。その隣に、自分たちが練習するコースをつくりまして、平成9年の11月24日に完成したのです。

その完成した日に、何と事故が起きるのです。自分の事故です。どんな事故かといいますと、一つだけ大きなジャンプ台をつくりまして、一つ目のジャンプ台から二つ目のジャンプ台まで大体20メートルから25メートルくらい、大きいジャンプをするのですが、高さは2階建ての屋根くらいまで上がるような。私が重機でつくって完成したので、みんなの前で飛んでみたのです。1回目、ブーンと来て、ポーンと飛んだのです。見事に成功しまして、近くで見ていた仲間が「おおー」と喜んで、わいわいやっていました。そうしたら、「もう一回」と始まりまして、「もう一回見たい、もう一回飛んで」と言うものですから、「ちょっと危ないけれども、じゃあ、もう一回だけ飛ぶね」と言って、ブーンと来て、ポーンと飛んだのです。そうしたら、ジャンプの距離がちょっと足りなくて、二つ目のジャンプ台の山の頂上にバイクががつんというふうに着地したのです。そのとき、が

一ん、というすごい衝撃とともに、自分はふらふらふらと、ばたんと転んでしまったのです。

転んで起き上がろうと思ったのですけれども、起き上がれなかったのです。また何度も起き上がろうと思うのですけれども、体が言うことを聞かないのです。おかしいなと思って足を見たら、動かしているはずの足が全然動かないのです。おかしいなと思って、両手で太もものところを触ったのですけれども、触っている感覚が全然なくて、そうしたらみぞおちあたりの背中に、ずきっ、という強い痛みが走りました。ああ、これはもしかして大変なけがをしてしまったのかなと瞬間的に思ったので、笑っていた友達に、笑って見ているのです、転んだのに「あはは」とかと言って。「いいから早く来て、早く来て」と言ったのですけれども、「いや、またまた」、「何言っているの」とかと言って、「いや、本当だから早く来て」と言ったら、みんなおうおうと寄ってきて、「大丈夫か、大丈夫か」、「いや、大丈夫じゃないから救急車呼んでちょうだい」と盛岡赤十字病院に運んでもらいました。

皆さん、背骨の写真はわかりますよね。レントゲンとMRI というものを撮ってもらって、当時はまだパソコンではなくて、ぺたっと張るものでしたので、ドクターがぺたっと張った瞬間に、「あーあ」という感じの背骨の無残な姿が映し出されるのです。胸椎の10番、11番のところ、みぞおちあたりなのですから、その骨がばらばらに、粉々に砕けていまして、それを見ながら病院の先生がうーんとうなるのです。うなりながら重い口を開くのです。見てわかるように胸椎の10番、11番がばらばらに、粉々に砕けて、それだけだったらいいのだけれども、ばらばらになった骨が真ん中の太い脊髄という神経をぐしゃっと潰してしまっているのだと、だからそこから下が動かないし、触っている感覚もないのだよということを言われました。ドクターはまたうーんとうなりながら重い口を開いて、手術をしてみないとわからないけれども、今の医学では99.9%、車椅子の生活になるかもしれないですよということを言われたのです。冗談じゃないと思いながら、手術でも何でもして、99.9%は車椅子というのだったら、残りの0.1%に賭けようということ、手術をしてもらい、入院生活を送ったのです。

当時、病院のベッドの上で何を考えていたかという、できないこと探しをしていました。とにかくまず歩けない、大好きなバイクにも乗れない。当時、上の子が2歳で、下の子がこれから生まれてくるという、お母さんのおなかの中にいました。子供と一緒にいろいろな夢もあったのです。山に登ったり、さんさ踊りに出たり、サッカーをしたり、海に連れていったり、いろいろな夢があったのですけれども、あれもできない、これもできないで、本当に希望のかけらも持てないような入院生活でした。

子供たちに「希望の反対は何ですか」と聞くと、みんな必ず「絶望で一す」と言います。絶望は死に至る病ともいえますけれども、正直、自分はもう生きていてもしょうがないのではないかと思った時期もありました。人を殺すには刃物は要らないといえますけれども、本当に生きる気力もなく、毎日病院のベッドの上で布団をかぶって泣いていたという、そ

のような自分だったのです。

でも、ある一つの出来事をきっかけに考え方が変わったのです。リハビリテーション専門病院に転院したのですが、そのときに両手と両足のない方に出会ったのです。その方は病気で両足を切断、上肢も両方切断して、上手に腕だけで車椅子をこいだり、義足をつけて歩く訓練をしたり、義手をつけて食事をする訓練をしていたのですけれども、それを見たときにすごく圧倒されまして、すごいなと思ったのです。

よく寝られないので、夜にたばこを吸うところにみんな集まって話すのですけれども、その方はたばこが大好きで、必ずいるのです。隣にいて、たばこの箱を上手に腕だけで持って、たばこを口にくわえるのです。手がないので、火がつけられないのです。どうするのかなど思っていたときに、隣にいる自分に頼むのです、「横澤君、悪いけど火をつけてくれる」と言って。私も何げなしに、たばこは吸わないのですけれども、ライターがそこにあったので、ちっちゃと火をつけてあげた瞬間に、が一んと、雷が落ちたような衝撃が走りました。あれ、自分は今まで歩けない、歩けないと失ったものばかり追いかけていたのだなど、自分にはちゃんと使える手があるし、できることってあるのだなどということに、その瞬間に気づかされるのです。そのときから、できないことを探すのではなくて、できること探しに挑戦してみようかなというように、自分の中の気持ちの変化というか、それがやはり大きかったですね。

いつも子供たちに話すのですけれども、自分一人でできること探しをしても見つからないときは友達と一緒にして、それでも見つからないときは学校の先生やおうちの方とか、みんなと一緒にすれば一つや二つは必ず見つかるから、そうしたらそれに向かって、勇気を振り絞って、できることに挑戦してみようという話をするのです。最初はできないかもしれないけれど、2度、3度、5回、10回とやっているうちに必ずできるようになって、それができたという、紙切れ1枚かもしれないけれど、できたという自信になって自分の心の中に積み重なるといって、そういう話をさせてもらっています。できること探しをして挑戦してできたという、紙1枚かもしれないのですけれども、その紙が10枚、100枚、1,000枚、1万枚になったときに、全然自信のない自分だったけれども、ちょっとずつ自信を取り戻してきたというような感じでしたので、子供たちにはいつもできること探しをして、挑戦しようという、そういうことをメッセージで送っています。

当時、車椅子になって、本当に自信がなかったです。今44歳ですけれども、車椅子になったのが25歳で、もう人生は終わったなと思いました。車椅子に乗って外出するのも勇気が要るのです。今は世界中を飛び回って、母親に鉄砲玉だねと言われているのですけれども、本当に勇気が要ることだったのです。

私が初めて一人でスーパーに買い物に行こうと、できることに挑戦するというある日の出来事がありまして、今でもすごく覚えているのですけれども、勇気が要るのです。まず、車に一人で乗って、車椅子を車に積み込んで、スーパーまで行くのです。そうすると車椅子用の駐車場があって、そこに車をとめて、でも勇気がなくて車から車椅子をおろせない

のです。ああできるかな、行けないかな、できるかな、行けないかなと葛藤して、やっぱりだめだと駐車場から家に戻るので。戻る最中に、いやだめだ、だめだと、ここで戻ったら俺の進歩はないと、勇気を振り絞って一人で買い物に行ってみようと、またスーパーに戻りまして、車から車椅子をおろして、買い物に行くのです。ただの買い物ですよ、誰にでもできるのですけれども。

買い物をし始めたら、私の欲しかった商品が棚の一番高いところにあったのです。ああ、やっぱりだめだと思って諦めかけていたときに、隣にいた女性の方が寄ってきてまして、「何かお手伝いしますか」と言われたのです。「あっ、ああ」とか言いながら指をさしたら「ああ、これですか。一つでいいですか。」と言って取って、ぼんと私のかごに入れてくれたのです。そのことがすごくうれしくて、自分でできないことは、こうやって誰かに手伝ってもらえばいいのだと、誰かの力をかりればできることってあるのだなと。すごく自分の自信になったし、世の中まだまだ捨てたものじゃないなと。外に出れば車椅子の駐車場もあるし、車椅子のトイレもあるし、こうやって手伝ってくれる、車椅子でも生きていけそうだなというふうには、ちょっとだけ希望が持てた出来事でありました。

そんなことをしながら、チェアスキーとの出会いがあるのですけれども、チェアスキーは最初からやろうと思ってやったスポーツではなかったのです。なぜやることになったかといいますと、リハビリテーション病院の作業療法士、理学療法士の先生方の勧めがあったのです。私が入院しているときは長野パラリンピックがちょうどテレビで放送されていて、病院のベッドの上で選手がすごいスピードで滑るのを見ていたのです。私は全然やる気がなかったのですが、入院した日に先生たちが来て「横澤君、よろしくお願ひします。横澤君も長野パラリンピックのように、パラリンピック選手を目指したらどう」と言われたのです。私はどうだったかという、冗談じゃないと。俺はパラリンピックに出るのではなくて、また歩けるようになって、必ずまたバイクに乗るのだと、そのためにリハビリテーション病院に来たのに、この先生たちは何てことを言うのだ、ということで、ちょっと反抗していました。

またある日、先生たちが来て、「横澤君、スピードは好き」と言うのです。「はい、好きです」と。「こうやってカーブを曲がるのは好き」と言われて、「ああ、そういうのは好きです」と。「だったらチェアスキーという乗り物があるから、横澤君にぴったりだと思う」と勧めるのです。私はこういう性格なので、表向きは100万ドルの笑顔で「そうですね、退院したら絶対やってみたいですね」と言いながら、腹の中では絶対やってやるものかと反抗していました。

またある日、今度は先生がチェアスキーの写真を持ってくるのです。「横澤君、これがチェアスキーで、こうやって滑るのだよ。横澤君だったら絶対にパラリンピックに出て、メダルをとれるくらいの選手になれると思うよ。」と言うのです。メダルをとれるくらいの選手になれると思うと言われると、まんざら嫌な思いもしないので、また私は100万ドルの笑顔で「そうですね」と言って、「必ずパラリンピックに出て、メダルをとれるくらいにな

ってみたいですね」と言いながら、腹の中では絶対にやらないと思っていました。

なぜ嫌だったかという、自分はずっと健常者として生きてきて、突然の事故でいきなり身体障害者手帳をもらうわけです。自分は、障がい者ということ自分を中で受け入れられていなかった、ただそれだけだったのです。健常者と障がい者って何なのだろう、同じ人間なのになぜこういうふうになってしまうのかなと、ちょっと不思議に感じた瞬間でもありました。

退院した次の日に先生から電話がかかってくるのです。「横澤君、退院おめでとう」、「はい、ありがとうございます」、「あした、仙台市からチェアスキーをする人が滑りに来るから、見に来ない」と言うのです。やるのは嫌だけれども、見に行くくらいだったら行ってあげてもいいかなと、ちょっと上からな感じだったのですけれども、見に行ったのです。

仙台市から来たチェアスキーのおじさん、50代のおじさんが1人、そのおじさんの隣に空のチェアスキーがぼつんと用意してあるのです。その空のチェアスキーの周りに先生が五、六人、担当の看護師さん、担当のドクターも来ているのです。何かおかしい空気を感じながら、「よく来たね」と言われて、「はい」と。向こうはリハビリテーションのプロですから、「きょう、たまたまチェアスキーが1台余っているのだよ」と言われて、「ええっ、余っているって」と言っているやさきに私を車椅子から持ち上げて、チェアスキーに乗せて、ベルトで縛るのですけれども、ぎゅっ、ぎゅっ縛られて拘束されるのです。もう身動きが取れないです。

ストックの先にミニスキーがついたものでバランスをとるのですけれども、アウトリガーといって、これを両手に持ちまして、先生たちが「前に動いてごらん」と言って、動く前に進むのです。「後ろに動いてごらん」と言って、こうやると後ろに、すーっと進むのです。誰でも進むのです。でも、先生たちはプロですから、過剰に褒めるのです。「うまいねえ」、「横澤君、バランスいいじゃない」とかと言われて、私も何かちょっとうれしくて「ありがとうございます」と言ったら、「じゃあ、せっかくだからリフトに乗って頂上へ行こう」と言われて、そのままリフトに強制的に乗せられまして、頂上まで拉致されました。

頂上に着いて、そこですごく感動したことが一つありまして、リフトをおりて頂上に行ったときの真っ白な雪景色が本当にきれいで、なぜかわからないですけれども、涙が込み上げてくるのです。俺も年を取ったのかなと思いつつ、当時26歳にもなって涙が込み上げてきて、とまらなくて、なぜ涙が出てくるのだろうなと思ったときに、けがをして車椅子になって、まさか山の頂上に来て、このような雪景色が見られると思っていなかったのです。思っていなかったのですけれども、チェアスキーという道具を使って、周りに支えてくれるサポートの人の力があって、初めて頂上に来て景色が見られたという、そのことにすごく感動したのです。できないと思っていたことができて、見られて、ああ、いいなと思つて、今でも真っ白な雪景色を覚えています。

いざ滑り出したのですけれども、すーっと滑り出して、5メートルくらい行って、ぱたんと転ぶのです。先生が「よし、頑張れ」と言って起こしてくれるのです。くそっと思

ながら、また、すーっと滑り出すと、1本スキーなのでどうしてもバランスが悪いのですね。すーっと行くと、「あー」と言って5メートルくらいでばたんと転ぶのです。くそっ、と思いながらまた起き上がって、「よし、頑張れ」と、すーっと、ばたんと転んで、最初は手の力が弱いので、一人では起き上がれないのです。起き上がれないで、もじもじ、もじもじ、汗だくになりながら、くそっ、と思っているときに、ぱっと上を見ると、仙台市から来たおじさんが格好よくきれいに、私の横をシャーッと、雪をかけながら行くのです。くそっ、と思ひまして、何であのおじさんにできて俺にできないのだと思って、かーっとなりまして、そのときにはっと気づかされたのです。

おなかの奥底から湧き上がってくる、バイクに乗っていたときの転んでも、転んでも世界一速くなってやるという、何かに挑戦する気持ちというのですか、闘争心というか、絶対うまくやってやるというチャレンジする気持ちが湧き上がってきた瞬間だったのです。そのときに、ああ、そうだ、俺は事故をして車椅子になって、何かに挑戦する気持ちを見失っていたのだなということに気づかされたのです。

頂上から1本、下まで滑り終えるまでに、多分、四、五時間かかりました。もうナイターの照明がつき始めて、パトロールの人が心配になって「大丈夫ですか」と迎えに来るくらいだったのですけれども、1本滑り終えて、車を一人で運転して帰ってきて、そのときに新しい夢が生まれるのです。

けがをして車椅子になって、今は足が動かないけれども、いつの日か医学が進歩して、今は再生医療とかがありますけれども、いつか歩ける日が来るかもしれない、その夢は夢でとっておこう、でも今できることから挑戦してみようかなという思いが込み上げてきました。だったら、テレビで見た長野パラリンピックで活躍する、ああいう選手になって、何か今までお世話になった人たちにできる恩返しはないのかなということで、入院中毎日のように足を運んでくれた家族や友達、医療現場の理学療法士、作業療法士の先生や看護スタッフ、ドクターも仕事とはいえ、真剣に私の将来について考えてくれたのです。貴重な休みの時間を使って、わざわざチェアスキーを借りてきて、私が5メートル行っては転ぶのを起こすことに1日費やしてくれる、この人たちって何なのだろうなと思ったときに、では自分にできる恩返しはパラリンピックに出場して、できれば岩手県にメダルを持ち帰ってくるのかなと、新しい夢が生まれた瞬間でもありました。

その日からパラリンピックへの挑戦が始まったのですけれども、正直、パラリンピックは目指せばすぐに出られると思っていました。でも、やはりそう甘い世界ではなくて、パラリンピックは障がい者スポーツといえどもトップは本当にアスリートなのです。ちょっと足が動かないとか、手がないとか、ちょっと視覚に障がいがあるとか、それだけで、あとは本当にアスリートなのです。海外に行くと、本当に人間なのかなと思うくらいストイックな選手がたくさんいますし、障がいがある、ないではないというのをすごく感じさせられました。

すぐ出られると思って始めたアルペンスキーだったのですけれども、なかなかうまくい

かずに、結果がなかなか出ない時期もあって、挫折も味わって、どうしても経済的理由で、海外遠征も莫大な資金が要りますし、諦めようかなと思った時期もあったのですけれども、そういうときにお世話になった人たちの顔がふっと浮かんでくるのです。自分のためではなくて、お世話になった人たちのためにも頑張らないと。

子供たちに、人生のリセットボタンという話をよくするのですけれども、「物事がうまくいかなかったとき、みんなどうする」という話をするのです。「じゃあ、みんなゲームは好き」、「はい」とみんな言うので、「ゲームがうまくいかなかったときはどうする」、「リセットボタンを押すとまた最初から始まる」、「そうだよ、人生にもそういうリセットボタンがあったらいいよね」、「じゃあみんなのリセットボタンは何なの」というような話をよくさせていただくのです。

私はリセットするときは、実は事故をして何日間か、3日から5日の間は命も危ないですよと言われた、すごく危なかった時期がありまして、そこに気持ちを戻すのです。そうすると、ああ、命があるだけよかったということ、そこにリセットをすると命があるから子供たちとも会えるし、こうやっていろいろな人ともかかわれるし、いろいろなことに挑戦できる、だからやはり命があるだけよかったよなということにいつも戻すのだよという話をさせてもらっています。だから、みんなも行き詰まったときは、初心に戻るという作業を試みたほうがよいのではないかと話をさせてもらっています。

東日本大震災津波のときにテレビで見たのですけれども、家を流され、車も職場も流され、大切な家族も流されてしまった女性が「全て流されたけど、命があるだけよかったです」というふうに泣きながらインタビューに答えていたのがすごく心に残っているのですけれども、やはりそうだなと思って、人間どんなにピンチになってもとにかく命があるだけよかったなと思うことで日々頑張っていけるよなということ、競技しながら感じさせてもらっています。

バンクーバーパラリンピックを目指す中で、地元岩手県でスキーを始めたのですけれども、実は練習環境を確保するのがすごく大変だったのです。当時、岩手県からパラリンピックを目指す選手は私が初めてだったので、全然基盤がないところから始めました。スキー場に行って、リフトの係の方に「これは、どうやって乗るのだ」と言われて、「危ないからやめたほうがいいのか」と断られたこともあったのですけれども、「何とかやってくれ」と言って、マンツーマンでどうすればうまく乗れるのかと、リフト乗り場の方と試行錯誤しました。高校生の練習に突撃して行って、ポールという赤と青のゲートがあるので、そこに入れてもらえないかと頼んでみたり、いろいろなスキー関係者にお願いして、やっと練習環境を整えてもらって、じゃあ一緒にやるかと言ってもらったり、そのような中で、パラリンピックを目指すのならこうしたほうがよい、ああしたほうがよいと、いろいろな協力者ができました。これは後ほど話をしたいと思うのですけれども、障がい者スポーツ、今までやったことのないことをいざやるとなると、なかなかうまくできないという壁にぶつかったのですけれども、それを次の世代のために環境を整えて行って

あげたい、きょう、このような機会をいただいたので、皆さんのお力をかりながら、岩手県の未来の選手をどんどん育てていけるような環境をつくっていただければと思います。

いざ本番のバンクーバーパラリンピックはどうだったかといいますと、結果は大回転 21 位ということで、全然メダルには届かなかったです。夢の舞台はどうだったかといいますと、現地は朝からざあざあ降りの大雨だったのです。普通なら中止になるようなコンディションなのですけれども、パラリンピックやオリンピックは中止にできないのですね。莫大なお金が動いているし、莫大な人が動いているので、何が何でも強行的にやるのです。競技は中断、中断で、コースはざくざく、ところどころ穴だらけで、六十何人の選手が出たのですけれども、半分以上、37 人が DNF という途中棄権、コースアウトするようなレースでした。

いざスタートラインに立ったときに、お世話になった人の顔が浮かんでくるのです。あの人にもお世話になったし、この人にもお世話になったしと、また涙が込み上げてきそうになったのですけれども、ぐっとこらえてスタートしました。滑っている最中は無我夢中で、真っ白で覚えていないです。でも、はっと見るとゴールラインを切っているのです。ああ、ゴールできた、お世話になった人たちのためにゴールしようと無我夢中で滑って、そうしたらもうゴールラインを切っていたのです。

観客席を見上げたのですけれども、日が暮れるくらいの時間だったので、観客もほとんどいなかったです。ざあざあ降りの中、観客もぼろぼろとしかいないところで、一番高いところで寄せ書きの入った日の丸を「父ちゃん、父ちゃん」というふうに掲げて一生懸命に応援する 2 人の息子の姿が目飛び込んできたときは、本当に、だあっと涙がとまりませんでした。生きていて本当によかったなと、諦めずに挑戦し続けてよかったなと思った瞬間でした。21 位という結果は悔しかったので、その悔しさは次の大会か、その次にぶつけようという思いで帰ってきました。本当に貴重な体験をさせてもらったし、そういう体験を未来の子供たちに伝えていきたいなという、今はそういう気持ちです。

いつも子供たちに伝えさせてもらっているものがあるのですけれども、夢や目標というものは、今の時代、持っていなくても生きてはいけます。夢や目標、別になくても生きていけるよと、確かにそうだと思います。私がけがを通してすごく感じたのは、バイクに乗っているときの自分は、日々トレーニングもつらいし、仕事も大変だし、いろいろな逆境が降りかかってくるのですけれども、自分の夢や目標に向かって、人生が楽しいのですね。生きがいがあるというか、生きる力が湧いてくるのです。どんなことがあっても頑張れる、人生楽しいなと、本当に人生の絶頂のときだったのです。でも、そのような人生の絶頂のときに、突然の事故で地獄のどん底に突き落とされて、夢も希望も目標も見失った自分というのは、死んでしまったほうがいいのではないかと思うくらい生きる力が湧いてこないです、本当にどうでもいいやと。よく自殺のニュースが入ってきますけれども、命を絶つ人はこういう気持ちなのかなというふうに、それくらい生きる力が湧いてこなかった。同じ自分でも、それくらい無力な自分でした。

でも、そのようなどん底で、人と物との出会いで人生は変わるといいますけれども、チェアスキーと出会い、いろいろな人と出会ったおかげで新しい夢が生まれた瞬間から、ちょっとずつですけれども、生きる力が湧いてきたのです。実は今、胸から下がびりびりしびりて電気が走っている感じもしますし、車椅子で生活しているといろいろな体の逆境があるのですけれども、でもそれに負けていられない、俺は頑張るのだと。普通だったら引きこもるくらいの痛みだったりするのですけれども、気にならなくなるくらい、何か生きる力が湧いてくるのです。よし、頑張らなきゃいけないと。新しい夢が生まれたときから生きる力が湧いてくると。

だから、いつも子供たちに伝えているのは、夢や目標を持たなくても生きていけるけれども、どうせ生きるのだったら夢や目標を持って、それに向かって挑戦しながら一生懸命に生きていったほうが人生にいろいろな感動があって、時には挫折を味わうかもしれないけれども、人生がすごく楽しいのではないかという話をさせてもらっています。

あとは、子供たちが夢や目標に向かって一生懸命に挑戦しているときに、もしかしたら私のように、突然の事故で地獄のどん底に落ちるときが来るかもしれないのですけれども、そのときは、そこからまたできること探しに挑戦して、新しい夢を見つける努力をして、挑戦しながら生きていってほしいなというメッセージを送っています。

最後になりますが、この間、ハンマー投げの室伏広治さんと話す機会がありまして、室伏さんも言っていました。結果も大事だという話もされるのですけれども、やはりスポーツは結果も大事ですよ。何かと結果を求められる社会だと思うのですけれども、室伏さんは、結果が全てではないという話をしました。金メダルをとることも大事だけれども、一番大切なのは、金メダルをとるという自分の夢や目標に向かって、一日一日、一瞬一瞬、大きな夢に向かって挑戦する過程に一番価値があるのだよという話をしていました。自分もそうだと思います。夢がかなう、かなわないも大事ですけれども、大きな自分の望みに向かって、一生懸命に一日一日を生きていく、その過程を一番大事にしてもらいたいと思って、いつも子供たちには、結果も大事だけれども、結果が全てじゃないよと、大きな夢に向かって挑戦することにすごく大切な、いろいろな意味が込められているのだよという話をさせてもらっています。

ちょっと長くなりましたけれども、私の経験の中の話はこれくらいにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

〔拍手〕

○横澤高德講師 きょうは、資料で障がい者スポーツから生涯スポーツへ導くために必要なことという、これは、ふれあいランド岩手にある岩手県障がい者スポーツ指導者協議会の事務局長、三浦さんという方が書いたもので、今度何かの会報に載せるといって、まだ表には出ていない資料のようですけれども、いい機会ですので資料として持ってきました。

これに書いているのは、多分、障がい者スポーツにおける現状と課題になると思うのです。1の障がい者スポーツを取り巻く環境の変化。皆さん御存じだと思うのですけれども、

私がバンクーバーパラリンピックへ行っているときは、障がい者スポーツ、パラリンピックは厚生労働省で、オリンピックは文部科学省、県で言うと普通のスポーツは教育委員会、障がい者スポーツは保健福祉部ですよね。やはり行政的な役割分担というか、分かれがあって、パラリンピックを目指す過程で正直いろいろ苦勞しました。今は、厚生労働省から文部科学省に移管した次にスポーツ庁が立ち上がりまして、障がい者スポーツの強化費などの予算は健常者と一緒のくくりで出るようになりましたし、東京オリンピック・パラリンピックが決まってから、環境が目まぐるしくよくなりました。それ以前は、選手がほとんど自己負担で海外遠征へ行ったりしていた、自分の選手としての挑戦と、どうやって資金を集めたらいいかという、お金の調達に苦勞したのですけれども、東京オリンピック・パラリンピックに向けて今すごく国が動いている時期なので、本当に今タイムリーではないかなと思っています。

2の障がい者スポーツの窓口としての役割について考える。障がい者スポーツというと、私のように途中で障がいになった方、あとは生まれつき障がいを持たれている方もいますし、高齢になってどうしてもという方もいます。生きていれば必ずどこかでかかわらざるを得ないのではないかなと思います。そういった中で、今まで障がい者を受け入れていなかった方が、障がい者の方も一緒にやりましょうといったとき、ではどういうふうにかかわったらいいのだろうか、けがさせたらどうなのだろうか、いろいろなリスクを伴うということがあると思います。ですので、そこがやはりちょっと特殊な感じがあるのかなと思います。

3の組織としての課題と解決方法とありますけれども、岩手県には障がい者スポーツ協会というものがありません。その役割を岩手県障がい者社会参加推進センターが、クライアントの皆さんがいるところなのですけれども、担っています。スポーツだけではなく文化芸術、全部やっているのです。「多種業務を少人数体制で担っているため」と書いていますけれども、少人数体制ではなくて1人でやっているのです。うまく書いていますけれども、1人でよくできるなと思います。そこがもうちょっと充実していけばよいのではないかなと思います。単に人をふやせばよいということではなくて、志のある方というか、生きた整備をしなければ。ただ事務的にこなすというのではなく、岩手県の障がい者スポーツをどういう方向に持っていったらよいのかというふうな、最終的には障がいを持っている方がスポーツをして、ああ、よかったとか、スポーツに出会えてよかったという、県民の方がよかったなと思えるような、幸せを感じるような形になっていければよいかなと思います。

1人で回しているのです、いろいろな団体とコンタクトをとって、一生懸命にやっています。国体に向けて強化とかいろいろ大変だと思うのですけれども、ほぼ休みなしでやっているのですかね。それが将来的に各地域に根づいていって、誰でも、どこでも、いつでも生涯スポーツというか。私のような障がいではなくて生涯スポーツという、障がいを持っている方も、誰でも、いつでも、どこでもスポーツができるという、岩手県は広いので、

地域で環境が整っていけばよいかなと思います。

4の障がい者スポーツから生涯スポーツへ。岩手県は教育委員会と保健福祉部に分かれている割に、現場では横のつながりが結構あるのです。健常者のスポーツと障がい者のスポーツについて、現場サイドではすごく、ああいいですよ、一緒にやりましょうという。でも、最終的に予算となったときは、やはり上のほうからの予算なので、別々といった感じになる、そういうことが今後の課題ではないかなと三浦さんとも話しています。

あと、福祉団体や特別支援学校、障がい者施設、キーになるのがやはりリハビリテーション施設等の理学療法士や作業療法士の方たちです。体についてすごく詳しいし、障がいについても詳しい、そういう方が一緒にスポーツにかかわることで、先ほど2でもあったように、どのように障がい者の方をスポーツに導いていったらよいか、すごくノウハウを持っている方たちがいるので、人材はあると思うのです。それをこれからどう生かしていったらよいかという課題でもありますし、やはり粘り強く継続していくということが大事ではないかと。単発的ではなく、じっくりということが大事ではないかなと思います。

あとは、救世主となるか卓球バレー。今、ふれあいランド岩手ではやっているらしいのですけれども、障がいを持っている人も持っていない人も、誰でも楽しめる卓球バレーが30チームくらいにふえて、みんなで楽しんでいるのですという紹介がありました。

以上、私からの話はこれくらいにして、あとは皆さんとざっくばらんに話したいと思います。よろしくお祈りします。

○名須川晋委員長 横澤先生、大変貴重なお話をありがとうございました。

これより質疑、意見交換を行います。ただいまお話しいただきましたことに関し、質疑、御意見等がございましたならお願いいたします。

○城内よしひこ委員 本当に貴重なお話をありがとうございました。

チェアスキーをやるまでの過程はわかったのですが、実際使われている・・・

○横澤高德講師 チェアスキー、幾らするのか。

○城内よしひこ委員 幾らもそうですけれども、つくる方が日本にたくさんはいないと思うのですが、競技人口を含めてどういった環境にあるのか。

○横澤高德講師 このチェアスキーは日本製ですけれども、日本の日進医療器株式会社という車椅子メーカーが、受注生産、オーダーメイドでつくっています。パラリンピックは4年置きですけれども、4年置きに各国で開発、技術競争をして進化しています。

○城内よしひこ委員 競技人口と、あと競技に参加する場合の規定、健常者の大会では用具の規定がありますが、そういったものはあるのですか。

○横澤高德講師 日本は競技人口が大分減ってしまっていて、長野パラリンピック以降は一気に増えて、チェアスキーだけでも100人弱くらいが大会に出ているのですけれども、今は本当にトップ選手10人くらいしかいないと。レジャーで楽しんでいる方もいらっしゃいます。競技はしないのですけれども、下肢に障がいがあつてチェアスキーでレジャースキーを楽しんでいる方も結構いらっしゃいます。

競技人口は大分減って、日本はちょっと危機的な状態です。トップ選手が引退すれば次の世代がないという危機的な状態、ジュニアの育成とかいろいろあるのですけれども、それが今後の課題になるのではないかと。

パラリンピックのレギュレーションは、国際スキー連盟、F I Sの規定に準じています。板の規定もコースの規定も全部健全者の大会と全く一緒です。危ないです。すごいスピードが出ます。緩和措置は若干あります。障がいを持つ人が滑るときに、どうしても技術的に厳しい部分は女子ルールを適用するなど、緩和措置が若干あります。

○城内よしひこ委員 ちなみに、値段は。

○横澤高德講師 これは下だけで 45 万円で、座るところは体に合わせてつくるのですけれども、スキーブーツの約 2 倍の 20 万円です。65 万円くらい、高いです。

サスペンションは、バイクのショックアブソーバーをつくっている K Y B 株式会社のレーシングサービスが開発しています。

日本、ドイツ、アメリカ、カナダが自国でつくっています。今日本のチェアスキーが世界のトップですね。ソチパラリンピックが終わって、2 年後にピョンチャン、韓国で開催ですので、今開発にすごい力が。実は、4 月に障がい者アルペンスキーのナショナルチームの連中が岩手県に 1 カ月くらい滞在していたときにテストをしました。毎年来ています。

○城内よしひこ委員 もう一点いいですか。強化費の捻出はどのような形でされているのか。

○横澤高德講師 それは、個人的に・・・

○城内よしひこ委員 個人的に。先ほどのお話で競技人口も少ないとなると。

○横澤高德講師 現状であれば、メダル数に応じて何かランクづけがあつて、国から日本障害者スキー連盟に強化費がおきて、その強化費で選手やジュニア枠が海外遠征へ行くといいふうになっています。当時はそういったことが充実していなかったもので、個人で捻出するという。後援会を立ち上げてもらって支援していただいたり、子供のための積み立てを切り崩して遠征に行ったりとか、家にあるバイクを 1 台売って遠征に行ってくるかといったり、本当に個人個人でやっていました。

自分がすごく感じたのは、スキー連盟で高校生の強化をやっていますよね。スキー場にポールを設置したりして。お金は別に要らないのですけれども、そういった環境を共有できればいいなとすごく思いました。高校生の強化費を使う中で、障がい者スキーで上を目指している選手がいるのだったら、一緒にどうぞという環境があれば、そこをもう少しこれから先、横のつながりといえますか。

理想を言うと、スポーツ庁が立ち上がって、岩手県も障がい者スポーツ、健全者スポーツをばらばらの部署で面倒を見るのではなくて、スポーツとして一本化して、では強化はどうしようかというふうにしたほうが、将来的に選手側がすごく目指しやすいというか。私の場合もやはりそこが大変でした。強化選手、高校生とかは、リフトチケットとか年間パス、岩手県内のスキー場はこれで全部滑れますよというものをもらえるようですね。そ

れを俺も欲しいなというように思って。ほんのちょっとしたことなのですけれども、この先その辺がもうちょっとつながっていけばいいなど。

○城内よしひこ委員 最後がいいですか。次の冬季パラリンピックに向けた思いをちょっと。さらに次の北京パラリンピックについても。

○横澤高德講師 実はソチパラリンピックを目指していたのですけれども、ちょっと大きなけがをして、残念ながら代表をぎりぎりのところで落ちまして、渋谷のNHKで解説をしていました。

ピョンチャンパラリンピックは見送ろうかなということで、その次の北京パラリンピックを目指して動き始めております。実は今、先ほどVTRであったのですけれども、息子がバイクのプロで海外に挑戦しようかなと、父親としての役割を果たして、それから集中したいなど。個人的な目標設定で、次の北京パラリンピックに向けて。

あと、後輩の育成ですね。若い選手がいて、車椅子ではないのですけれども、障がいを持っている子が矢巾町にいますし、次の世代をどうしても出すというのはあります。健常人の人材育成はしっかりしているのですけれども、障がい者の選手は、今までぼつんぼつんと湧いてきた選手が勝手に、たまたまパラリンピック行ったという、単発的なのです。だから、健常人のように小さいときからスポーツにかかわって育成していくという環境も整えないといけないよねと三浦さんと話しています。私もたまたま出たいというような感じが出てきた選手だし、その人がいなくなれば誰もいませんよになってしまうのですけれども、そういうものではなくて、生涯スポーツとしていろいろな人がスポーツにかかわる中から、ではパラリンピックに出てみたいという、ぼんと出てきた選手を育てていくという環境が必要なのだと思います。

○中平均委員 どうもありがとうございました。

お話を聞いて、確かにソチパラリンピックのときですかね、BS放送で放送していましたよね。私はいつもオリンピックについて、これからリオオリンピック・パラリンピックも始まりますが、どう思っているのかというと、よく普通のオリンピックは絶えず民放でも流し、リアルタイムでと、ところがパラリンピックとなるとBS放送でぎりぎり見られるかなと。オリンピックのほうでも人気がない競技は放送しない、金メダルをとらないと思った競技で金メダルをとったら急に放送し始めるということもありますけれども、それにしても極端過ぎるのかなと思っていて、そこら辺の思いというのは。

○横澤高德講師 そうですね、本当にそのとおりですよ。パラリンピックは30分番組しかないとか。実際にNHKにいても、現場でパラリンピックを伝える人たちはオリンピック並みに放送したい人たちなのです。絶対にリアルタイムでやるしかないと言っている人たちの集まりなのですけれども、上のほうの意向なのですかね、何なのですかね。

あと、新聞だと、障がい者のスポーツはスポーツ欄ではなく社会面に載るのですけれども、ずっと何なのだろうなど。同じスポーツなのに何で社会欄なのかなと。

今までの流れというか、歴史というか、リオオリンピック・パラリンピックが始まって、

東京オリンピック・パラリンピックまでの間にどう変化していくのか。

○**中平均委員** やはりそこら辺なのかなと思うのです。今スポーツ庁ができて、県でもそのうちあると思うのですが、そうになっていく中で、それでもよい悪いではなくて、露出が少ない。例えば強化費のほかに、スポンサー探しも厳しいというところもあると思うのですけれども、それはマスコミサイドだけの問題ではなくて、私自身も考えていかなければならないし、今度国体があって、厚生労働省のほうの課題もあるという中での捉え方を、この機会に岩手県としてやっていかなければならないと、そしてその先に東京オリンピック・パラリンピックに向けて進んでいくところがあると思っているのですけれども、今度の国体、障がい者の大会もありますけれども、どういった捉え方をしていいたらよいのか。私たちも、まずは見て、観戦していこうというのもあると思うのですが。

○**横澤高德講師** 国体の冬季大会のエキシビジョンで、健常者のスキー大会で初、全国初ということで、一緒に会場で滑らせていただいたのですけれども、そういった機会をつくってくれた県の職員の方はすごいと思いますし、全国からも岩手県でそういうことをやったのだということですので注目されているようです。

あとは、全国障害者スポーツ大会、あと80日くらいで開催ですけれども、メダルとか勝つとか、そういうこともすごく大事、そちらに目が行きがちだとは思いますが、国体をやすることでスポーツにかかわる障がい者、当事者もそうですし、その選手を受け入れる会社の人や、選手を支える側の人たちというのですか、実は、障がい者スポーツの大会に出る選手をうちの会社で1人雇用したいのだと、会社の社長さんに連絡をいただいたこともあるのですけれども、スポーツをすることで社会参加とか、受け入れる会社側の考え方もどんどん変わっていくということがありますので、スポーツで勝つという部分も大事ですけれども、間接的な部分もすごく大事なのではないかとこのように思います。

トップ選手は本当に一握りで、そこまでストイックにやるとなると、自分のようにねじが外れた選手でないと難しいのですけれども、単純にスポーツを楽しみたいとか、スポーツを通していろいろな人とかわりたいたいという人もたくさんいますので、その幅を広げるいい機会になってほしいなというふうに思います。

○**中平均委員** ありがとうございます。

今お話しになったとおりでと思います。岩手県は今まで国体に強化費をつけてやっていますし、私自身も前から言っているのですけれども、国体が終わった途端にスポーツ関係の予算を減らすとか、今まで往々にしてあります。障がい者スポーツを含むスポーツに予算をかけてきて、そして裾野を広げようとやってきている、トップ選手、生涯スポーツで楽しむ方、皆さんのいるところをきちんとやっていくということがまた底上げにつながっていくのだらうと思っています。そういった意味で、私たちもいろいろな声を発していきたいと思いますし、今後も御指導いただければと、そしてきっとマスコミの皆さんも声を出してくれるのではないかなと、そういう期待をしたいなと思っていますので、どうぞよろしくをお願いします。

○佐々木努委員 ちょっと二つ三つ聞きたいのですけれども、リハビリ中に理学療法士さんや作業療法士さんなどからチェアスキーを勧められたということなのですか、この方々はこういった思いで横澤さんにスキーをさせようと思ったのか、あるいは、若い人が事故に遭ったりした場合には、そういうことを積極的にやろうと、勧めようというふうなものがあるのか、その辺はなぜ。

○横澤高德講師 いわてリハビリテーションセンターに入院していたのですけれども、リハビリをして社会復帰させるという施設です。今の理事長、高橋明先生ともよくお話しをするのですけれども、医療現場では、その人にとってどういうことがこれからの人生にとってベストなのかということを常に考えていると言われました。自分の場合はバイクだけがをしたから、岩手県らしいスキーが一番よいのではないかというふうに医療スタッフみんなで話をし、まんまとはめられたというような感じですし、若い子で途中で障がいを持って入院してくる患者さんもいますので、その子にとって何がよいか、例えばバスケットボールに行く選手もいますし、テニスに行く選手も。そこを医療現場、特に社会復帰を目指すリハビリテーションの部分では考えていると私は思います。

○佐々木努委員 大会に行く際は、いろいろなサポートが必要だと思うのですけれども、スポーツ種目によって違うと思うのですが、チェアスキーの場合はどういう方々の、どういうサポートがありましたか。

○横澤高德講師 障がい者スポーツは、やはり一人でやるのはすごく大変です。一人でやるのが難しいと言ったほうが良いと思うのですけれども、必ずサポーターの力が必要です。最初の車椅子からスキーに乗ることが一人でできない、最初は3人くらいつくのです。後ろでロープをつけて制動する人がいて、左右にも、1人に最低3人くらいつきます。バスケットボールは車椅子を運ぶ人がいますし、必ずサポーターの力が必要です。そこにかかわっている方は意外とリハビリテーションスタッフが多いです。患者さんが退院しました、新しく何々を始めようと思うのです、では一緒にやろうかという感じでつながっている、そこから人の輪が広がっていくような感じ。あとは、やはり支援学校の先生ですね。

○佐々木努委員 最後の一つ。お父さんがバイクの事故でこういう状況になってしまったのは、子供さんも何かいろいろ思うところがあるのでしょうか、お二人ともなのですか、バイクは。

○横澤高德講師 そうですね、長男と次男の2人で。

○佐々木努委員 やらせようと思ったその辺の思いというのは、どうでしょうか。

○横澤高德講師 確かに、自分がバイクでけがをして、よく子供にやらせるねと言われるのですけれども、きっかけは、車椅子になってから、「お父さんが小さいときにやっていたバイクのレースを見に行ってみようか」と言って、子供を連れて全日本選手権を見に行ったことです。帰ってきたら「僕もバイクに乗りたい」と言い出して、えっ、と思ったのですけれども、「危ないのだよ、本当にやりたい」と言ったら「本当にやりたい」と言うので。生き方として夢を持って、目標に向かって一生懸命に挑戦して、その中から人として成長

して行ってほしいなという思いだけです。無目標で、ただ何となく生きてはほしくないなと思ったし、自分が経験したのですけれども、無目標ほど弱い人間、生きる力が湧いてこない弱さはないから、本当にやりたいのだったら、世界一を目指してやろうねというふうに小さいときに目標設定をしました。3人で、今途中なのですけれども、ちょうどこの間、全日本選手権で4番に入ることができまして、必ず世界で1位になろうねと一生懸命に挑戦中です。

自分が夢に挑戦させてもらったおかげで、次の世代の息子たちがそういうものを見つけた、世代で伝わっているのかなという感じはします。でも、毎回、がたがた震えています。けがをしないようにと、がたがたがたと震えます。

○高橋但馬委員 ありがとうございます。

中平均委員の質問にちょっと関連するのですけれども、パラリンピックをBS放送とかでしか放送しないということについて、海外の報道ではどうなのかという部分と、あとは、本当に基本的なこと申しわけないのですけれども、小さいころは毎日、学校から帰ってきてバイクに乗っていたと。チェアスキーをやるようになって、練習に行く、ゲレンデに行くとなったときに、ちょっと佐々木努委員と一緒になのですけれども、車をおりて、リフトで下から上に上がって、滑走しておりてくるという中にどれくらいの補助の方が、行って帰ってくる一連の練習の中でどれくらいの補助の方が必要なのかということをお教えしてほしいです。

○横澤高德講師 海外の報道は普通に、パラリンピックやワールドカップのアルペンスキーは普通のスポーツ放送の中で放送しています。私たちが遠征に行くのはオーストリアやスイスとかです。スキーの文化があるところなのです。私たちが行くと、テレビで見たよと普通に言われます。海外の報道は、余りそこの垣根はないです。

日本がちょっと特殊なのかなと。特殊と言ったらいいのか、そういう文化と言ったらいいのか。東京オリンピック・パラリンピックがなかったら多分変わっていないのでしょうね。あれでマスコミの方も、オリンピック・パラリンピックと必ず口にするようになりました。

あと、補助は、今は全部一人でやります。一人で行って、一人でおろして、一人でチェアスキーに乗って、リフトに乗って。全部一人で、介助なしで。

○高橋但馬委員 リフトはどうやって。

○横澤高德講師 リフトは、ここにレバー、こうやって、こういうふうにリフトアップします。ここにリフトの搬器が入る、腕の力でぐっと上げるのですけれども、そこにリフトの搬器がちょうど来るので、この辺の椅子をきゅっとかかむというような感じ。つかみそびれると、ああっ、という感じです。よく落ちるのですけれども、一人で自立します。

ただ、自立できるまでにどうしてもワンシーズンくらいかかります。腕の力だったり起き上がるこつだったり、雪上に乗せるバランスだったり。それまでは、どうしても最低1人くらいは介助がないとちょっと厳しいです。でも、ワンシーズンそうやってゲレンデ

に通って、大体一人で自立できるようになります。

あと、リフトから落ちたときや、林に突っ込んだときは、パトロールの人に電話をして「済みません、助けてください」、「大丈夫ですか」、「大丈夫じゃないです」と。最近はパトロールの人とも仲がよいです。何か怪しい動きをしていたら、すぐ電話がかかってくる、「大丈夫ですか」と。

○高橋但馬委員 マスコミの話ですけれども、例えば日本のマスコミに対して団体として何か要望、要するにオリンピックと同じように扱ってほしいというような要望活動はしているのですか。

○横澤高德講師 多分、団体としては出していないと思います。そういった話を聞いたことがないですけれども、ソチパラリンピックのときに、解説で渋谷のNHKに10日くらい行ったのですけれども、ファクスが届きます。視聴者の方から、なぜパラリンピックは30分枠でしか放送しないのですか、というようなファクスが結構届きます。みんなそうだよねと言いながら、NHKの人たちは決められたとおりにやるだけですけれども。民放の衛星放送では全放送をやります。国の流れがここまで変わってきているので、変えざるを得ないのではないかなとは思っています。

○千葉絢子副委員長 本日はありがとうございました。本当に涙しながら聞かせていただきました。

質問させていただきたいのは、私の母も震災の年に脳の病気で下半身麻痺になりました。中途障がいになってしまって、そこから3年くらいはずっと毎日、死にたい、死にたいと言って暮らしていました。その気持ちを何とか上向きにするために、もう一人子供を産んで、いろいろ試みて、ようやく最近は死にたいという言葉が聞かれなくなったのです。障がい者の方、例えば中途障がいでもなかなか気持ちが上向きになれない方、その方をどうやってもう一回社会の表舞台に引っ張り出していったらいいのか。環境を整えました、さあどうぞといっても、なかなか前向きになれないというか、その一歩が踏み出せなくなると思うのですね。もう一回表舞台に引き出すために、私たちがどんなことをしたらいいのか。

それから、横澤さんもスポーツを始められたときに周りのスタッフの方、入院中にサポートして下さった方が主にお手伝いをしてくださったということがわかりましたけれども、ただ、御自身としては周りのサポートして下さる方に、例えば遠慮してしまったりとか、なかなか言い出せなかったりとか、それからサポーターの方たちも自分のお仕事がある中でどうやって支援活動を継続しているのか、そこをちょっとお伺いしたいなと思います。

○横澤高德講師 これから団塊の世代が高齢になって、途中で障がいを持つ方がもっとふえると思います。確かに体が動かなくなると絶望すると思うのですけれども、そこが一番難しいところですね。周りはどうにか社会復帰とか、元気になるかもしれない、とやるのですけれども、本人がどこでびびっとくるかはわからない、けれども、受け入れる側がや

り続ける、継続しかないような気がします。

やはり整えていくのがすごく大事だと思います。私が車椅子になって、ぼんと社会に出たときに最初に感じたのは、世の中まんざら捨てたものじゃないなと、車椅子でも生きていけそうだなと。でも、いざ出ると、ここもまだまだだな、ここももっと直さないと、というところが20年たってもまだありますので。

今回、スポーツの話なのですけれども、スポーツがきっかけで社会参加する人も結構います。スポーツがきっかけでいろいろな人とかかわったり、いろいろな人と出会ったり、スポーツをやるために仕事も頑張るといように仕事を探し出す子もいるのです。全部つながっていることでもありますし、実際にやる楽しみもありますし、見る楽しみ、支える楽しみ、いろいろあると思うのです。そういった何かのきっかけが必要なのではないかなと思うので、継続しかないですね。

○千葉絢子副委員長 できていたころのイメージが抜けきれなくて、先ほど申し上げたように、障がいのある自分というのがなかなか受け入れられない、そこを受け入れられるようになるまでに、励ますのも逆効果、しようがないじゃないと言っても逆効果、どうしたらいいのかと本当に。

○横澤高德講師 そういう思いをする家族の方がこれからもっとふえると思いますし、医療関係で2025問題というものがあります。団塊の世代が高齢になって、例えば脳梗塞になると。でも、外に出るきっかけにもなりますし、体を動かすだけで笑顔になったりもしますし、そういった部分でスポーツは生涯スポーツというふうに整えておいたほうがよいのではないかなと思います。

あと、ふれあいランド岩手がありますので、でも、今ちょっと偏っていますね。もともとは障がいを持っている方がぼんと行って、スポーツを楽しめるという施設だったようですけれども、まだちょっとどうなのかなという感じはありますので、そこも今後もうちょっと変わっていったらいいなと。

長野県に、ふれあいランド岩手よりも前にできた、サンアップルという施設があるのですけれども、そこは、ぼんと行くと、どこの県の人でも水泳ができたり、すぐバスケットボールやテニスができたり、すごく環境がよいですし、専門スタッフがいるので、ぼんと行って、どこでも、誰でも、という感じで抵抗なく入れる。岩手県は広いので、そういうところをたくさんつくるのは大変ですけれども、拠点的ところがまず一つしっかりとできて、そこから徐々に波及していけばよいかなと思います。

スタッフは、もう本当に個人的なつき合いですね。プライベートの時間を使ってくれます。パラリンピックに出たいという目標が生まれてからは、ああこうだ、と言えないので、リハビリテーション施設に行って、先生たちの仕事が終わるのを待ち構えて、ナイターと一緒に行きませんかと誘って、一緒に行ってもらって滑って、ワンシーズン、週に何回かつき合ってもらって、やっと自立、一人で滑れるようになった。多分、ちょっと図々しかったと思うのです。「済みません、きょう一緒に行きませんか」という感じで。だ

から、本当に個人的なつき合いになりますね。

○名須川晋委員長 最後にお一人ほど。

あと、チェアスキーを持ってきていただいておりますので、皆さんで見てください。先ほど持たせてもらったのですが、すごく重いのです。それをお一人でどうやっているのかというのちょっと疑問だったのですが、よろしいですか、皆さん近くに行ってください。

〔チェアスキー用具を見学〕

○名須川晋委員長 まだまだ質問されたいところと思いますけれども、そろそろ時間でございますので、ここで締めをさせていただきます。

横澤様、本日はお忙しいところ、まことにありがとうございました。恐らく岩手県も来年度くらいから、スポーツ行政が一元化になるのではないかなというふうに思っておりますけれども、ぜひとも岩手県議会でも障がい者スポーツから生涯スポーツへというふうなことで取り組んでまいりたいと思いますので、今後とも御指導のほど、お願い申し上げます。

きょうは大変貴重なお話をいただきまして、大変参考となりました。それでは、拍手でお送りをいたしたいと思います。

〔拍手〕

○名須川晋委員長 委員の皆様には次回の委員会運営等について御相談がございますので、しばしお残りを願います。

次に、9月に予定されております次回の当委員会の調査事項についてであります、御意見等がありますか。

〔「委員長一任」と呼ぶ者あり〕

○名須川晋委員長 特に御意見等がなければ、当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ございませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○名須川晋委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。